

マサバ *Scomber japonicus*



高知県ではゴマサバの方がポピュラーですが、マサバも県内各地で水揚げされます。大きなマサバはゴマサバと比べると（写真左）、体の下側にゴマを振ったような黒い斑点がなく、尾鰭が黄色になり、ゴマサバよりも体高が高いことから、「平さば」とも呼ばれます。しかし、写真右のように（尾叉長 20cm 以下、写真は 10cm 前後）、小さい時はこれらの特徴で区別しにくく、専門的には第一背鰭条数（背鰭の前部の筋の数）が少ないことで区別します（マサバは 9～10、ゴマサバは 11～12）。味は、秋～春にかけて脂がのり、おいしくなります。

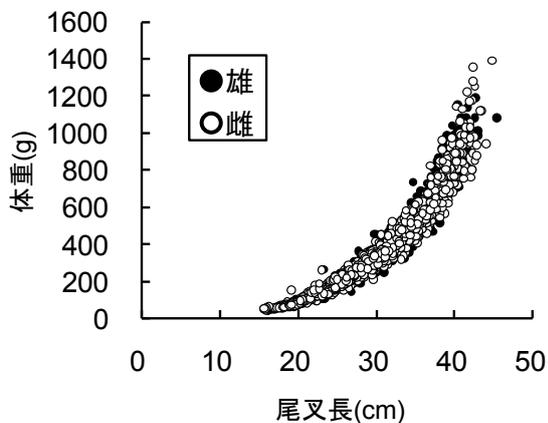


図1 高知県産マサバの尾叉長と体重の関係（昭和 54 年～平成 21 年）。

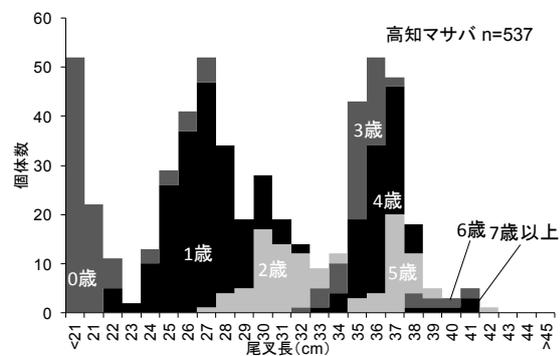


図2 高知県産マサバの尾叉長別年齢組成（平成 23～28 年）。

生物特性

各年齢の尾叉長と体重は、1歳が 29cm (250～300g)、2歳が 32cm (400～450g)、3歳が 34cm (450～550g) です（図 2）。高知県水産試験場で測定されたマサバの中で最も大きかったのは土佐清水で漁獲された尾叉長 44.8cm、体重 1,390g の個体でした。

マサバは主に 29cm 以上で成熟し、1～6 月に伊豆諸島周辺～東シナ海の各地で産

卵します。高知県では室戸岬沖等に産卵場があることが確認されており、2～4月に成熟個体が増えます(図3)。産卵後、稚魚となったマサバは夏～秋に三陸～北海道沖で成長し、秋～冬になると、南下回遊します。

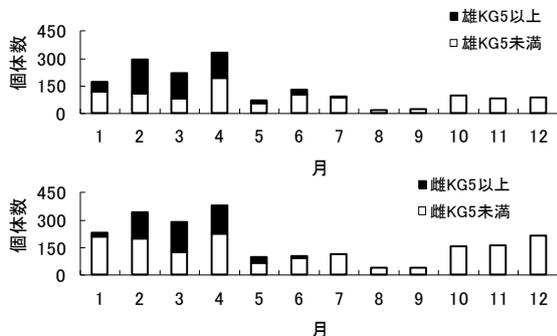


図3 高知県産マサバの成熟係数(KG)の推移(昭和54年～平成28年)。

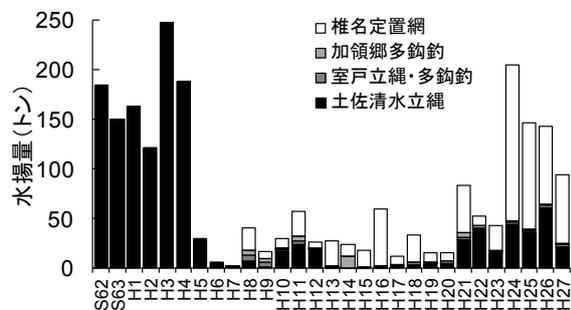


図4 高知県下4地点におけるマサバ漁獲量(土佐清水以外は平成8年以降)。

資源動向

高知県で漁獲されるマサバは、ゴマサバ同様、主に太平洋系群に含まれ、一部東シナ海で生まれた群も来遊します。マサバ太平洋系群の資源量は昭和55年(1979年)まで高水準でしたが、その後、平成2年(1990年)まで減少し、資源量は盛期の20分の1以下となりました。平成17年(2005年)以降、マサバ太平洋系群は回復傾向にあり、平成28年度(2016年)の資源評価では、水準は「中位」、動向は「増加」傾向にあるとされています。

県内の漁獲動向

高知県内の漁獲量については、ゴマサバと同じく、正確な値は把握できていませんが、高知県水産試験場では4地点で長期的にマサバ水揚量を調査しています(図4)。平成5年(1993年)以降、マサバ水揚量は大きく減少しましたが、マサバ太平洋系群の資源量増加の影響で平成21年(2009年)から増加傾向にあります。

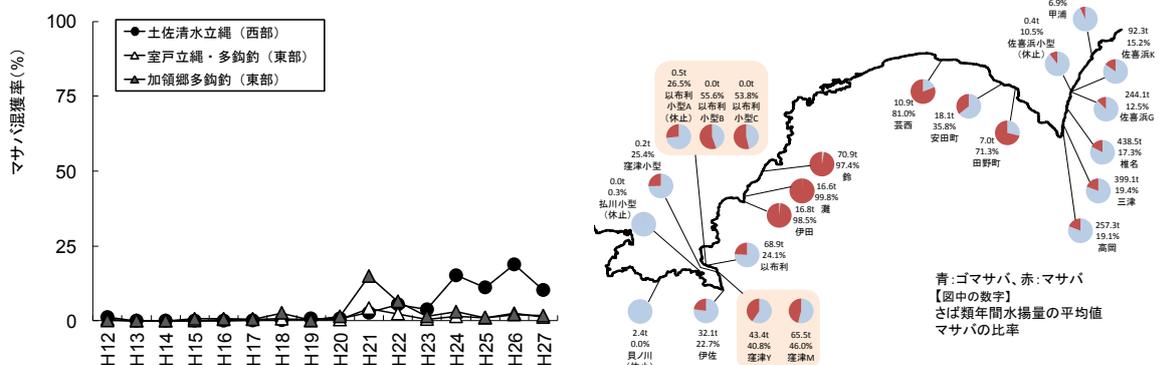


図5 高知県東西部の各漁法別マサバ混獲率(左:釣漁業の年別混獲率、右:定置網漁業の平成22～27年平均混獲率)。

各地域における漁法別マサバの混獲率は（図 5）、定置網漁業の方が釣漁業（多鈎釣・立縄）より高く、土佐湾中央部の定置網は特にマサバが多く漁獲されます。これは、マサバがゴマサバよりも沿岸性が強く、低水温を好む性質を反映したものと考えられます。なお、さば類 2 種の生息水温はゴマサバが 17～26℃、マサバが 10～26℃とされています。

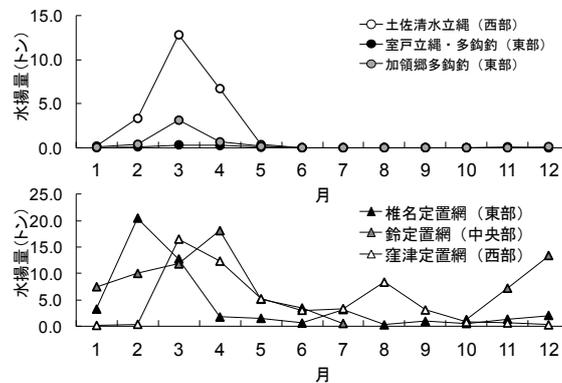


図 6 各漁法で漁獲されたマサバの平均月別漁獲量
(平成 17～26 年、鈴と窪津は平成 22～26 年).

過去 10 年間の各月の平均水揚量を見ると、釣漁業でマサバが漁獲される時期は、2～4 月の産卵期に限られます（図 6）。定置網漁業では、2～4 月に加えて、8 月以降にも漁獲量が増加していました。これは、太平洋北部に北上せず、高知県沿岸に残っている群を漁獲していると考えられます。